



## ポーランドの「ジェンダー」議論

もぎ のりえ  
茂木 規江

●アダム・ミツケヴィチ大学 言語学科・講師

90年代に入り「ジェンダー」という概念がポーランドのマスコミなどに取り上げられるようになった。当時は一部の人達にしか理解されていなかったが、今では日常的に人々の目に触れる言葉になった。学問として「ジェンダー」を使っている人たちの定義と、「ジェンダー」思想が自分の立場を脅かすものとするカトリック教会の定義は異なるだろう。では、大多数の一般の人たちの理解はどうなのだろうか。マスコミを通して目に触れる機会の増えている言葉の割に、「ジェンダー」とはとの問いに、自信を持ってはっきりとした返事をする人たちは少ないような気がする。

ここで、全国日刊紙のGazeta Wyborczaが2月22日に掲載した記事の一部を紹介したい。

ピアセチノ町議会で「ジェンダー」拒否が可決された。そこで、記者が市民に「ジェンダー」とは何かと聞いたところ、ある人は、テレビで聞いたことはあるのだが、誰も説明してくれたことがないから、なんだか分らないと答えた。そこで、「ジェンダー」とは社会・文化的性であること、そして世界保健機構の性の定義にもふれ、今では、女性も働き稼いで（男性もではなく）男性が子供の面倒を見るという混乱したステレオタイプもあること、さらに、「ジェンダー」は誤解に包まれており、イデオロギー（教会関係者が暗にナチスや共産主義を指す言葉）だと反対する人や、また、

幼稚園で男の子が女の子の洋服を着させられることだと、さえ言う人もいることなどを説明した。すると、「町議会で、男の子に女の子の格好をさせてはいけないとしたのなら、賛成だ。」「男の子が女の子の服を着させられるなら反対だ。」との返事が返ってきたが、その男性は自身が子供の時、お母さんと一緒にケーキを焼くのが好きだったことを思い出し「実家にも『ジェンダー』があったんだ。」と言ったそうだ。

孫と散歩をしている年配の男性に「ジェンダー」思想について尋ねたところ、興味もないし、知りたくもない、非現実的な思想に過ぎない、という返事が返ってきた。ある住民は、健康保険を使った無料の医療では何か月、時には1年も順番待ちをしなければいけない自分にとっては、医療問題のほうが「ジェンダー」よりも大切だと言った。ある夫人は、夫は家事を手伝ってくれるから、夫は「ジェンダー」だと答えた。62歳の女性にとっては、「ジェンダー」と「同性愛」とが同義だったようで、自分は古い考えの人間だから、もし男性のカップルが子供を育てているとしたら、変に思うだろう。でも、この町には「ジェンダー」よりも大事な問題があると、言った。76歳の男性は、「ジェンダー」は南の国々の差別を受けている女性を助けることが目的のはずなのに、町議会では同性愛結婚や、猥褻コンテンツのことなど全く違う内容を論議していると言った。



町内の幼稚園や学校で「ジェンダー」をどのように扱っているか尋ねたところ、ある幼稚園では、当幼稚園では男の子が女の子の洋服を着させられるとかは無いし、その逆も無い、男の子が人形で遊びたがればそれを許すと、言われた。またある学校では、偏った教育はせず、中立的な物の言い方をすると説明を受けた。

上記のように、マスコミが頻繁に取り上げる「ジェンダー」という言葉が、人々によく理解されていないというのは不思議ではあるが、そもそも町議会にかけなければならない案件であったのかと問いたい。またわざわざ「ジェンダー」を否定する必要があったのか、誰が何の目的で問題にしたのか等、不可解な点が多い。これは教会が仮想の敵を作り上げ、それと闘っていると世間に訴える様子と共通点があるように思えてならない。

社会主義時代には反体制の象徴であったポーランドのカトリック教会は、以前ほどの社会的影響力は無いのだが、いまだ発言を続ける教会が語ることを、鵜呑みにする人たちも決して少なくない。カトリック司教たちの会議が、何らかの行事・祝日に因んだ「司教会議からの書簡」という形で、全国各教会のミサで説教の代わりに読み上げられる文書を、発信する習慣があるそうだ。去年の12月、聖家族の日の前に書簡の内容がインターネット上で公表された。内容は、教会が激しく「ジェ

ンダー」を批判したものだったそうだ。教会にとって「ジェンダー」とは、イデオロギーであり、伝統的なあるべき一男性と女性からなる夫婦を中心とした一家族を壊すものようだ。そのために、ジェンダー哲学・思想を認めることは、教会の社会的地位を弱めると思い込んでいる。したがって、「ジェンダー」とは、教会と相反する、伝統的価値観を揺るがす恐ろしいものと映るようだ。

EUの方針で、ジェンダーに関する枠組みが決められ、教会がそれを独自の視線から解釈を加え論争し始めたことで、「ジェンダー」はますます教会と対立するものとなってしまった。まるで教会は、「ジェンダー」という見えざるものを敵とし、それと戦うことで、自分たちの砦を守り、かつ社会貢献もでき、その地位をも守っていると思込んでいるようだ。しかし教会がジェンダー批判をする度に、マスコミはそれを面白おかしく報道する。それによって、マスコミも暗に「ジェンダー」を軽視していると言っているようにも見える。

議論対象物があやふやなまま、議論をするという行為に酔った人たちが無駄な論争を重ねる様子を、マスコミが嘲笑う。ポーランド社会に「ジェンダー」が大切な思想ならば、マスコミは揚げ足を取るだけではなく概念紹介・説明に力を注ぐべきだろう。